

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18530757  
 研究課題名 (和文) 大学における広汎性発達障害者への支援  
 —大学生実態調査と支援体制の構築をめざして—  
 研究課題名 (英文) Support for the Students with Pervasive Developmental Disorders in  
 University -Investigation to build an Advanced Support System-  
 研究代表者  
 北添 紀子 (KITAZOE NORIKO)  
 高知大学・教育研究部医療学系・講師  
 研究者番号：70284437

研究成果の概要 (和文)：本研究は、広汎性発達障害のある学生に対する、大学での支援体制の充実が目的である。入学時の健康診断で Autism-Spectrum Quotient (AQ) を行い、カットオフポイント等を考慮して面接を呼び掛けた。実施した支援の内、学業の支援、就職の支援が特に不十分であった。学業の支援として大学院生による個別補習のプログラムを開始した。また、自助グループ活動の支援を行い、活動の中で就職に関する情報提供も行った。教職員に対しては、講演会、研修会で啓蒙を行い、パンフレットを作成し個別配布を行った。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study is to improve the supporting system for university students with Pervasive Developmental Disorders (PDD). At the health checkups of new comers, we examined the students by the Autism-Spectrum Quotient (AQ), and interviewed them taking consideration of the cutoff point of AQ. In our support system for the student with PDD the support for school work and finding jobs were inadequate. As the support for school work, we started individual supplementary lesson by graduate students. We also made support the self-help group activities and provided information for finding jobs. For faculty members, we conducted the lectures and created a brochure to improve understanding the students with the developmental disorder.

## 交付決定額

(金額単位：円)

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2006 年度 | 1,900,000 | 0       | 1,900,000 |
| 2007 年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2008 年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2009 年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 総計      | 3,800,000 | 570,000 | 4,370,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：広汎性発達障害、大学生、Autism-Spectrum Quotient (AQ)、支援体制

## 1. 研究開始当初の背景

近年の調査では、知的障害のない広汎性発達障害 (以下 PDD) の有病率が従来の見積も

りをはるかにしのぐような高率であることが指摘 (本田・清水, 2000) されている。小児期には診断されなかったアスペルガー症

候群・高機能自閉症者が青年期になってさまざまな不適応状態や精神症状、問題行動を呈しうることはよく知られている。

大学進学率の増加に伴い、キャンパスでのサポートの重要性が指摘されている（辻井・宮本，2000）。平成 17 年 4 月 1 日に施行となった発達障害者支援法（衆議院ホームページ）では、大学としても授業の方法や環境の調整が求められている。しかし、発達障害のある学生への支援は、学生相談担当者を中心に試行錯誤の中で行われているのが現状であり（岩田，2007）、大学教員の PDD についての知識や理解も不十分であると思われる。大学としての支援体制の検討が必要であると考え。

## 2. 研究の目的

### (1) The Autism-Spectrum Quotient (AQ) 調査

現在のところ、学生本人が発達障害の診断を受け、障害受容を経て大学に入学するケースは少ない（西村，2006）。そのため、教職員が PDD の疑われる学生に気づく必要がある。PDD か否かの鑑別に際しては、幼児期の状態を丹念にたどることが必要不可欠である（杉山，2002）。本研究では The Autism-Spectrum Quotient（Baron-Cohen，2000，若林，2004）（以下 AQ）を実施した。AQ を診断のために用いるのではなく、高得点の学生に対して、問題行動を呈する以前より個別のアプローチをし、必要に応じた支援体制を取りやすくすることを目的とした。

また、4 年間の新入生の結果をまとめ、支援のための基礎資料とすること目的とする。

### (2) 支援

面接の中で困難となっていることがない

かの確認、予想される課題について検討する。どのような形の支援が望ましいのか、ケースごとに支援を検討していく。支援を振り返り、大学としての支援体制を構築する方向性を探る。

### (3) 啓蒙活動

教職員の理解を深めるための、大学教職員への啓蒙活動を実施する。

## 3. 研究の方法

### (1) The Autism-Spectrum Quotient 調査

2006年度～2009年度の新入生を対象として調査を行った。これまで、入学時の健康診断で行ってきた University Personality Inventory（松原，1995）（以下UPI）、面接希望の有無に加えて2006年度より、AQを追加した。

健康診断前日のオリエンテーションでアンケートの趣旨、取り扱い等を明記した用紙を配布し、健康診断時に協力が得られた学生より回答を得た。AQ 得点が 33 点以上の学生に対しては面接を呼びかけ、応じた学生について面接を行った。面接で ASD が疑われた学生、適応状態が懸念された学生に対しては、以後の面接を提案した。尚、同時期に、UPI でスクリーニングされた学生、面接希望の学生にも面接を呼びかけた。

また、2006 年度～2008 年度の入学生を対象として 2 年時の健康診断時に、1 年後の AQ 調査の協力を依頼した。

統計解析は、T 検定、分散分析とその後の検定は Tukey 法、 $\chi^2$  検定を用いた。いずれの検定においても危険率 5%未満を有意差ありとした。統計処理には SPSS for windows version17 を使用した。

### (2) 支援

AQ 高得点者に対しては個別の面接を呼びか

け、自閉症スペクトラム障害(以下ASD)が疑われる場合には継続面接を提案した。面接の中で、日常生活、学習、履修、単位取得、友人関係など、具体的に話し合い、困難となっていることがないか、予想される課題について学生と話し合う。継続面接で得られた情報をもとに、どのような形の支援が望ましいのか、ケースごとに支援を検討した。

### (3) 啓蒙活動

学内の研修会を通じてPDDの理解と支援の啓蒙を行った。また、教職員向けに、発達障害に関するパンフレットの作成をした。

## 4. 研究成果

### (1) The Autism-Spectrum Quotient 調査

#### ①基本統計量

回答者は3618名(男性1833名、女性1785名)、回答率92.0%であった。回答者の平均年齢は18.3歳。AQ平均得点は20.9r...点であった。

AQが33点以上の学生は128名(男性76名、女性52名)、3.5%で、そのうち面接が実施できた学生は64名(男性36名・女性28名)であった。面接で、ASDが疑われた学生は19名(男性14名・女性5名)であった。同時期にUPIでスクリーニングされた学生、面接希望の学生にも面接を呼びかけたので、AQがカットオフポイント以下で、面接をした456名のうちASDが疑われた学生は4名(男性2名・女性2名)であった。つまり、面接を行った学生520名のうちASDが疑われた学生は23名(男性16名・女性7名)であった。

#### ②男女差

男女別のAQ平均値は、男性21.6点、女性20.3点で、男性が有意に高値であった( $p < 0.001$ )。

### ③学部間差

学部別のAQ平均値は、人文学部20.5点、教育学部19.6点、農学部21.5点、理学部22.0点で、農学部、理学部が人文学部・教育学部に比べ有意に高値であった。また、人文学部と教育学部間で有意差を認め、人文学部が有意に高値であった(図1)。

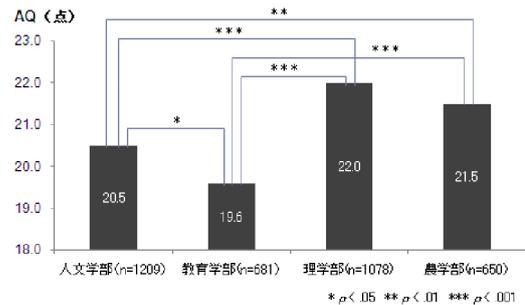


図1 AQ得点の学部差

### ④面接希望との関連

面接希望有群、無群別では、AQ平均値は面接希望有群24.2点、希望無群20.8点で面接希望有群が有意に高値であった( $p < 0.001$ ) (図2)。

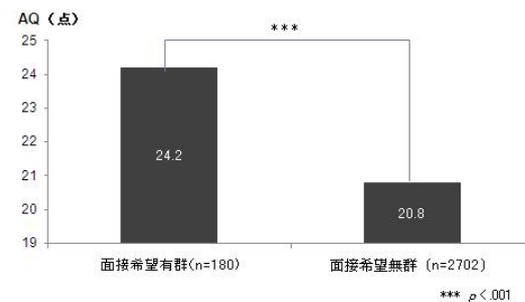


図2 面接希望の有無とAQ得点

AQ得点を、カットオフポイントで33点以上と33点未満の群にわけ、面接希望の有無について比較した。AQ得点が33点以上の学生128名のうち面接希望ありは13.3%で、AQ得点33点未満群の面接希望あり4.7%に比べて有意差を認めた( $p < 0.001$ ) (図3)。

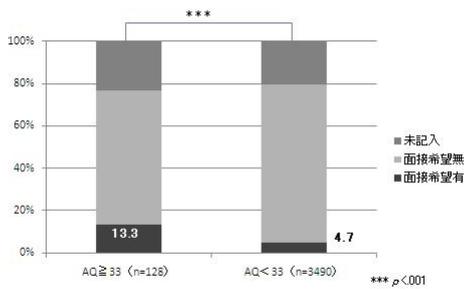


図3 AQ得点と面接希望の割合

### ⑤UPI との関連

AQ得点とUPI合計、UPI各項目との関連においてPearsonの相関係数は、全体を対象とした場合、AQ得点とUPI合計得点間は0.418とやや強い正の相関が認められた。Pearsonの相関係数が0.3以上の項目を表1に示した。

AQ得点が33点以上を対象として、Pearsonの相関係数が0.3以上の項目を表2に示した。全体を対象とした場合と同様に、強い相関は認められなかった。しかし、「気分が明るい」、「ものごとに自信がもてない」は全体を対象とした場合と逆の相関を示していた(表2)。

表1 AQとUPIとの相関(全体; n=3618)

| 内容                  | Pearsonの相関係数 |
|---------------------|--------------|
| UPI 合計              | 0.418 **     |
| UPI 20 いつも活動的である    | -0.320 **    |
| UPI 21 気が小さすぎる      | 0.315 **     |
| UPI 35 気分が明るい       | -0.324 **    |
| UPI 38 ものごとに自信をもてない | 0.306 **     |
| UPI 39 何事もためらいがちである | 0.306 **     |
| UPI 43 つきあいが嫌である    | 0.349 **     |
| UPI 44 ひけめを感じる      | 0.317 **     |

\*\* p < .01

表2 AQ とUPI との相関 (AQ ≥ 33 ; n=128)

| 内容                  | Pearsonの相関係数 |
|---------------------|--------------|
| UPI 35 気分が明るい       | 0.371**      |
| UPI 38 ものごとに自信をもてない | -0.331**     |

\*\* p < .01

ASDが疑われた学生を対象として、Pearsonの相関係数が0.3以上の項目を表4に示した。

「くり返し確かめないと苦しい」、「ものごとに自信を持ってない」、「こだわりすぎる」、「つまらぬ考えがとれない」でやや強い正の相関が認められた(表3)。

表3 AQとUPIとの相関(S/O ASD; n=23)

| 内容                   | Pearsonの相関係数 |
|----------------------|--------------|
| UPI 合計               | 0.312        |
| UPI 27 何事もためらいがちである  | 0.323        |
| UPI 30 人に頼りすぎる       | 0.328        |
| UPI 36 なんとなく不安である    | 0.370        |
| UPI 38 ものごとに自信をもてない  | 0.405        |
| UPI 40 他人にわるくとられやすい  | 0.317        |
| UPI 51 こだわりすぎる       | 0.399        |
| UPI 52 くり返し確かめないと苦しい | 0.448*       |
| UPI 54 つまらぬ考えがとれない   | 0.399        |
| UPI 58 他人の視線が気になる    | 0.323        |

\*\* p < .05

### ⑥1年後のAQ結果

入学時と1年後のAQ得点、下位項目を比較した。入学時のAQ得点が33点以上の群でAQ得点(p<0.01)と、下位項目ではコミュニケーション(p<0.05)で有意差が認められ、2年時が有意に低下していた。

### (2) 支援

#### ①他大学の調査

先進的に取組を行っている大学(上智大学および聖学院大学)に、訪問、聞き取り調査を行った。

#### ②面接

ASDが疑われた学生、適応が懸念された学生に対しては、自覚的に困っていない、問題行動が表面化していない場合も、近況報告的に保健管理センターの利用を促した。対人関係に関する支援は、ASDの特性を考慮して対応するように心がけた。例えば、対人関係のトラブルが相談された時は、できるだけ詳しく状況を確認し、学生の考えと相手との考えがどこで違っているのか説明する、説明は

できるだけ視覚的に、数字や図表を用いて行う、予定の確認はメモを使うなどである。

### ③学業に関する支援

2005年度に支援を振り返ったところ、情緒的支援、行動のアドバイス、学内外のサービス利用、スケジュール管理などは従来のカウンセリング技法の活用で可能であったが、学業や卒後の進路、就職に関する支援は不十分であった。そこで、学習支援プログラムを新設した。学生の希望と教員の意見を総合して補習科目を決定し、大学院生による個別補習を行った(図4)。補習場所は保健管理センターで、困難な事象があれば対応できるように体制を整えた。大学院生には、「あいまいな質問には返事をしないかもしれない」、「目をあわさなかったり、下を向いたまま返事をするかもしれない」など補習時に予想される反応を伝え、それらは学生の特性であることを補習開始以前に説明した。大学院生への報酬は大学経費により支払われた。

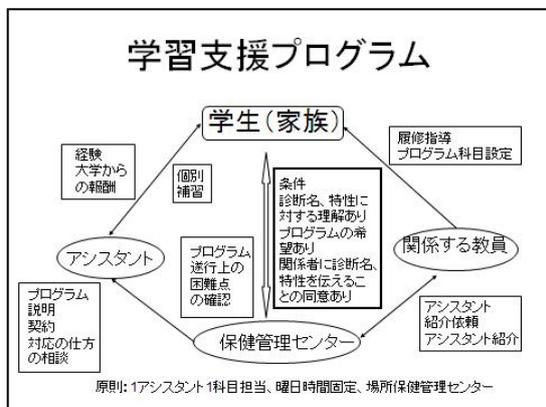


図4 学習支援プログラム

### ④就職に関する支援

就職支援は、就職支援室利用の仲介、求人と一緒に探す、SST的な面接練習などを行ってきた。また、グループ活動の一環として、障害者職業センター、ハローワークの見学を行った。しかし、大学としての就職支援システムは構築できなかった。

### ⑤グループ活動

学生相談は個別の対応が中心ではあるが、ASDのある学生にとって、他者とのかかわることができることが心理的な安定を生み、現実的な取り組みを可能にすると指摘されている(熊谷・辻井, 2005)。学生自身の特性理解をより深めること、大学生活での仲間作りを目的として、大学内でASDの学生を対象としたグループ活動を試みた。

学生が参加しやすい長期休暇を利用して、1クール5回、1回1時間30分のセッションを2回行った。現在は月1回の定例として、1回1時間30分のセッションを継続中である。学生からは、「情報入手と交流の両方ができてよかった」、「就職について自分からは動き出すことが怖かったが、みんなで勉強することで、何をどうすればいいのかを考えられてよかった」、「同じ悩みを持っている人もいて何となく安心した」という意見が得られた。

### ⑥支援の評価

2005年度、2007年度に関わった、ASDが疑われる学生に対して行った支援について自己評価を行った。対人関係については支援がうまくいかない事例を多く認めた。実習・実験、授業、レポートの困難事は半数の事例で必要としているが、支援は機能していないことが多かった。職業選択は多くの事例で必要としていたが、支援はうまく行えていなかった。

支援が機能しなかった理由は、トラブル等の対応に追われ、学業の支援が後回しになってしまったこと、支援者自身が効果的な方法を見つけられなかったことが挙げられた。また、学習支援プログラムの問題点として、本校の規模の学生数ではアシスタント学生が見つからないこともあった。連携に関して、学生から同意が得られなかった事例も認められた。就職支援は、就職活動までに時間が

ある場合は特に、話題にあまり反応がみられず介入が難しい、学生の意向と支援者の勧めに隔たりが大きいなどが、支援が機能しない理由であった。

### (3) 啓蒙活動

教職員が発達障害の知識を持ち、大学全体として支援をしていく必要がある。

2007年度には佐藤克敏准教授(京都教育大学 発達障害学科)を招聘して、一般参加も含めての講演会を、また、毎年、教授会後の時間を利用してのミニ研修会を行った。

また、教職員向けのパンフレットを作成し、学生と直接かかわりのある教職員に対しては個別配布を行った。

学内の身体障害学生支援委員会に対して、発達障害の学生、精神障害の学生への支援も必要であることを働きかけた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 是永かな子、水内豊和、スウェーデン・イエーテボリ大学における障害学生への教育的対応の現状と課題、LD研究、査読有、19(1)、2010、47-57
- ② 北添紀子、藤田尚文、寺田信一、是永かな子、泉本雄司、植田味佐、大学生における自閉症スペクトラムの実態調査－the Autism-Spectrum Quotient結果の分析－、LD研究、査読有、18(1)、2009、66-71
- ③ 北添紀子、泉本雄司、寺田信一、是永かな子、藤田尚文、植田味佐、吉倉紳一、広汎性発達障害を有する学生のサポート、CAMPUS HEALTH、査読有、45(2)、2008、93-97

[学会発表] (計10件)

- ① 北添紀子、泉本雄司、大学生における自閉症スペクトラムの調査 - AQ結果の分析(第3報) - 、第50回日本児童青年精神医学会総会、2009年10月2日、京都市
- ② 北添紀子、惣田聡子、梅田牧、小八木朝海、泉本雄司、岩崎泰正、広汎性発達障害のある学生に対するグループ活動の試み、第47回全国大学保健管理研究集会、2009年9月17日、札幌市
- ③ 是永かな子、水内豊和、スウェーデン・イエーテボリ大学における障害学生への教育的対応の現状と課題、第17回LD学会、2008年11月22日、広島市

[その他]

平成20年2月23日(土) 朝日新聞 夕刊  
に関連記事掲載

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

北添 紀子 (KITAZOE NORIKO) 高知大学・教育研究部医療学系・講師  
研究者番号：70284437

### (2) 研究分担者

泉本 雄司 (IZUMOTO YUJI) 高知大学・教育研究部医療学系・講師  
研究者番号：20325418  
是永 かな子 (KORENAGA KANAKO)  
高知大学・教育研究部人文社会学系・准教授  
研究者番号：90380302  
寺田 信一 (TERADA SHIN-ICHI) 高知大学・教育研究部人文社会学系・教授  
研究者番号：00346701  
藤田 尚文 (FUJITA NAOFUMI) 高知大学・教育研究部医療学系・教授  
研究者番号：10165384  
岩崎 泰正 (IWASAKI YASUMASA) 高知大学・教育研究部医療学系・教授  
研究者番号：30303613 (H21)  
植田 味佐 (UEDA WASA) 前高知大学・教育研究部医療学系・教授  
研究者番号：0033283 (H19、20)  
倉繁 迪 (KURASIGE MICHI) 前高知大学・保健管理センター・教授  
研究者番号：90253343